「みこし」

昨年の９月中旬、町内で催された例大祭の風景です。神輿（みこし）を担いで町内を巡り、社殿前の広場で神輿を、それこそ“わっしょいわっしょい”と何度も練ってお祭りが最高潮になった時の情景です。

当町内のお祭りに関するおよその情報は次のようなものです。江戸時代以前には既に村落共同体が存在し、江戸から明治にかけて氏神や神社を中心とした地域の信仰が起こり、その後雨乞いやどんど焼きなどが氏神や神社の前で行われるようになり、昭和初期のまだ農村だった頃に神社を祭る祭礼が地域住民によって行われるようになったとされています。

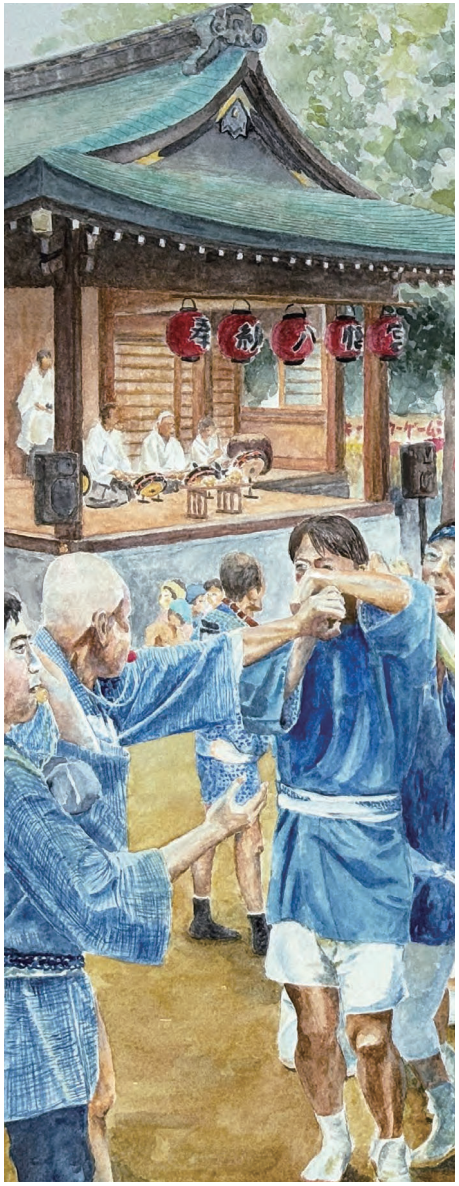
日本には古くから自然の全てに神が宿っているとする考えがあります。とりわけ農耕では種まき時に豊作を願い、収穫時には実りを感謝するなど、これらが儀式・祭りとして氏神や神社を中心に暮らしに根付いてきた歴史があります。現在ユネスコ無形文化遺産に“地域社会の安泰や災厄防除を願い、地域の人々が一体となり執り行う山・鉾・屋台の巡行”41件（2022年現在）が登録されています。登録された祭は京都祇園祭や日立風流物など、規模の大きさは“お神輿わっしょい”の祭とは比較にならないものですが、その起源は同じようなものと言って良いでしょう。

当町内のお祭りも先ほど述べた通り古くから（起源は不明）引き継がれてきたものですが、町の都市化に伴う新たな区割り変更や新規住民の参入などで、祭りの維持に多くの問題を抱えていることも事実です。

希薄化する住民の連帯感を引き起こす時代にふさわしい“みこし”になって欲しいものと願いつつレポートを終わります。



菊岡　保人





Size：530×455㎜（F10）